



青山教会会報

「栄光の重み」

コリントの信徒への手紙二

四章一六〜一八節

自由が丘教会牧師

田中 光

私たちには誰しも、背負っている様々な重荷や苦難があります。しかし、パウロはそれらを「軽い」とか「一時のもの」と言っています。彼は重荷や苦難よりも重みがあり、永遠に存続するものを見つめているのです。パウロにとつてそれは、その艱難とは「比べものにならないほど重みのある永遠の栄光」でありました。それはこの世のものではない、永遠とか神に属することに他なりません。

たとえ苦難の中にあつても、自分は永遠とか神に属することを一切求めることはないと思われたかもしれません。しかし、本当にそうでしょうか。イギリスの作家C.S.ルイスは、今日のコリント二、四章一七節の聖書の言葉に寄せて「栄光の

重み」という札拝説教を書き残してあります。この中でルイスは、私たちの心の奥底にある神への渴望と、神のリアリティーについて、次のような興味深い文章を書き残しています。

「人間の肉体的な飢えは、だからその者はパンを手に入れるということにはなりません。彼は大西洋上の筏の上で飢え死にするかもしれません。しかし人間の飢えが、人間は食うことによつてその体力を回復し、食物の存する世界に住む種族であるという証拠になることは確かです。同様に、わたしの天国への渴望が、わたしがそれを享受するだろうという証拠になるとは信じませんが、それはそういうものがあるということ、それを享受する人もあるということの、かなり確かな徴だとは思ふのです。」

このルイスの言葉が正しいとすれば、パウロという人が私たちの想像を絶する真剣さを持って、恐ろしい苦難のその只中で尚、この世界を超え永遠の輝きに引き寄せられ、その神の栄光の素晴らしさに打ち震えているという事実は、ルイスが言う通り、パウロの幻想ではなくて、そのパウロの渴望を満たすものが確実に存在しているという徴になるのではない

でしょうか。そして私たちもまた実は、それを心から渴望しているのです。

しかしでは、この世を超えた永遠のリアリティー、重みとは一体どんなものなのでしょうか。聖書はこのことを言い表すために、度々「栄光」という言葉を用いています。これは「名声」とか「輝き」といった意味を持つ言葉であり、神の素晴らしさを表現する言葉です。そして大切なことは、聖書には、神と出会い救われるということは、そうした神の名声とか輝きが、私たち人間に分け与えられるということを含むのだと説明している箇所がいろいろとあるということです。そして実は今日の箇所でもパウロが渴望しているのもそういうことだと思ふのです。

しかし、ここで誤解してはいけないのは、「栄光」が名声や輝きという意味だからと言って、「神の栄光が分け与えられる」ということが、人からの名声、良い評判が得ることを意味してはいないということです。実際今日のコリント書を含めたパウロの手紙を読んでいくと、パウロがそうした人間からの評判を気にしているという様子は一切見られませんし、むしろそういうものを「塵芥とみなしている」と彼は言っています。従つて、パウロは

むしろここで、私たち人間が神の栄光へと参与すると語ることによつて、私たちが神から良い評判を得、完全に受け入れられるということを考えていると理解できます。つまり、パウロが希望としている「栄光」とは、神から認められること、神から完全に知られ、神に受け入れられることと密接に関係しているのです。

何故神から認められ、知られることが、困難の中での人間の究極の希望となるのかと思われたかもしれません。しかし、考えてみますと、そもそも私たちの経験する艱難や苦難重荷の根本は、私たちを本当の意味で受け止めてくれるものがどこにもないということに起因しています。人間が人間を、その存在丸ごと受け入れ、知り、愛するということには限界があります。そして、そうした存在を私たちがこの地上に見出すことができないからこそ、私たちはいろいろな仕方ですんでいるのではないのでしょうか。そして実は、そのように苦しむ私たちを本当の意味で受け止め、知ることができないのは、神だけなのではないのでしょうか。全てを作り、私たちをつくり、この世界を支えておられるこの途方もなく小さな愛に満ちた神がもし、途方もなく小さな罪

深い私たちに目を留めて、私たちを喜びつつ迎え、「よく来たね」と言つて受け止めてくださるのだとすれば、それこそが私たちにとつての最も大きな報いとなり、救いとなるのではないのでしょうか。

もしこのようにして、私たちの存在が丸ごと神に受け止められ、私たちが神の輝く命に包まれることが、パウロの求めている「重みのある栄光」と呼ばれるものであつて、しかもそれが私たちにとつて根本的に必要なものであるならば、素直にそれを求めたいと思うのです。しかし、それが「いつか」与えられるということではありません。今日のみ言葉を読みますと、この救いの出来事は、実は既にこの世で始まっていると語られています。パウロは今日のコリント書の御言葉において、「艱難」が「栄光」を「もたらす」という言い方をしています。そして興味深いことに、「もたらす」という言葉の元の言葉は、「準備する」と訳すこともできます。そうしますと、大変に不思議なことなのですが、実は神の栄光に与る道は、私たちがこの地上で様々な苦難や困難を抱えているまさにそのただ中で始まっているということになるのです。

私たちの苦難や困難が私たちを包受け

とめる神の栄光へと繋がっている理由は、私たちがキリストと結ばれているところにあります。私たちはキリストに結ばれる時、キリストが十字架の死の苦しみから復活という栄光へとたらされたのと同じように、私たちの人生もこのキリストにかたどつて形作られることになるのです。つまり、私たちの苦難や艱難は、キリストがそうであつたように、神の栄光、神の真の命にあずかる入り口となるのです。だからこそパウロはここで、自分の経験している苦難が、この世界を超えた神の栄光の重みへと通じていると確信しているのです。私たちもまたキリストに結ばれているのですから、パウロと同じこの希望に生きるものとして歩みたく存じます。

(一一月二〇日特別伝道礼拝説教要旨)

